

対立する議論のバイアスがかかった同化と態度変化：
関係づけ処理の調整効果

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 敬一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009518

対立する議論のバイアスがかかった同化と態度変化

－関係づけ処理の調整効果－

Biased Assimilation of Conflicting Arguments and Attitude Change:
Moderating Effects of Relational Processing

小林 敬一

Keiichi KOBAYASHI

（平成27年10月1日受理）

This study examined whether and how relational processing of conflicting arguments influences biased assimilation and attitude change. Undergraduate students ($n = 105$) read two conflicting texts, which argued over disclosure of identifying information about sperm donor to children born through donor insemination, and then evaluated the persuasiveness of the whole texts and individual arguments in the texts. Participants in the support condition were encouraged to interrelatedly process arguments in the texts, whereas participants in the no support condition were not. The perceived persuasiveness of the whole texts was biased in favor of initial attitudes for the no support condition but not for the support condition. Comprehension of the rhetorical relationship did not significantly moderate the influence of prior attitudes on the perceived persuasiveness of the whole texts or individual arguments in the texts. For the no support condition, initial attitudes indirectly influenced attitude change through the perceived persuasiveness of the whole texts. These results suggest that relational processing is a moderator of biased assimilation, thereby influencing attitude change.

1. 問題と目的

例えば、健康診断の基準値、原発再稼働、危険地域での取材活動など、社会の中には論争をはらむ数多くの問題があり、メディアやインターネットなどを介して、私たちはしばしばそれらの問題を巡って対立する議論に出会う（e.g., Kim, 2011; Nagler, 2014）。対立する議論との接触により両サイドの考え方や根拠を知ることができるため、常識的に考えるならば、各議論の受け止め方、問題に対する意見はより穏当になりそうである。しかし、実際には必ずしもそうならない。対立する議論の評価、それに伴う態度の変化は、問題に関して個々人があらかじめ抱いている意見や信念、見方（以下、事前態度）に制約され歪められることが知られている。本論文ではこの現象を取り上げ、検討を加える。

1.1. バイアスがかかった同化と態度変化

対立する議論の評価と態度変化に及ぼす事前態度の影響を実験的に検討した先駆的研究として、Lord, Ross, & Lepper (1979) が挙げられる。Lord et al. は、死刑制度賛成の大学生と反対の大学生に、死刑制度の犯罪抑止効果を支持する研究（方法、結果、結論、想定される反論への再反論）と支持しない研究を（最初に研究の概要を、それから研究の詳細な内容を）1つずつ読んでその出来のよさと説得力を評価してもらい、さらに死刑制度に対する自分の意見がどのくらい変化したか評定してもらった。その結果、死刑制度賛成の大学生は反対の大学生よりも犯罪抑止効果を支持する研究を肯定的に評価し、犯罪抑止効果を支持しない研究については逆のパターンが見られた。また、賛成の大学生は、概要や詳細な内容を読んだ後、死刑制度に対する意見がより賛成の方向に変化したと評定し、逆に反対の大学生はより反対の方向に変化したと評定していた。Lord et al. は、事前態度と整合する議論（研究）が整合しない議論よりも好意的に評価される現象をバイアスがかかった同化 (biased assimilation)、対立する議論との接触によって元の態度が強化される現象を態度の両極化 (attitude polarization) と名づけた。そして、研究に対する評価と意見変化の間には正の相関が見られたことから、バイアスがかかった同化を媒介にして態度の両極化が起きるのではないかと推測している。

Lord et al. (1979) 以降、バイアスがかかった同化やそれによる態度の両極化を検証する数多くの試みがなされてきた。このうち、態度の両極化に関する研究知見は大きく2つに分かれている。すなわち、間接的測度（態度変化の自己評定）を用いた場合にのみ両極化が見られることを示した研究 (Corner, Whitmarsh, & Xenias, 2012; Greitemeyer, 2014; Kuhn & Lao, 1996; Miller, McHoskey, Bane, & Dowd, 1993; Munro & Ditto, 1997; Munro, Ditto, Lockhart, Fagerlin, Gready, & Peterson, 2002) と、直接的測度（事前・事後態度評定値の比較）を用いて両極化を見出した研究 (Krosnick, Holbrook, & Visser, 2000; McHoskey, 1995; Pomerantz, Chaiken, & Tordesillas, 1995; Taber, Cann, & Kucsova, 2009; Taber & Lodge, 2006) がある。対照的に、バイアスがかかった同化の頑健性を示唆する証拠は多い (Corner et al., 2012; Druckman & Bolsen, 2011; Edwards & Smith, 1996; Greitemeyer, 2014; Lord, Lepper, & Preston, 1984; Miller et al., 1993; Munro & Ditto, 1997; Munro et al., 2002; Pomerantz et al., 1995; Pyszczynski, Greenberg, & Holt, 1985; Richardson, Huddy, & Morgan, 2008; Taber et al., 2009; Taber & Lodge, 2006; Tsfati, 2003)。また、間接的測度か直接的測度かにかかわらず、対立する議論の評価と態度変化の関係を調べた研究のほとんどで両者に正の相関があることが見出されてきた (Druckman & Bolsen, 2011; Miller et al., 1993; Taber et al., 2009; Taber & Lodge, 2006)。その上、Greitemeyer (2014) と McHoskey (1995) はそれぞれ直接的測度と間接的測度で、事前態度が議論の評価を介して態度変化に影響することを示しており、これらの知見は全体としてバイアスがかかった同化の媒介効果を支持している。

1.2. 対立する議論の関連づけ処理

バイアスがかかった同化研究は、ある1つの仮定を暗黙裏に前提としてきた。それは、対立する議論と接触しても、受け手がそれらを互いに関連づけることなく個々バラバラに処理し評価するという仮定である。事実、バイアスがかかった同化に関する典型的な実験パラダイム (e.g., Lord et al., 1979) を見ると、対立する議論を1つずつ実験参加者に提示し評価してもらう手続きをとっている。このような手続きは、議論を評価する際に（まだ提示されていないの

で) 次の議論を踏まえたり (後戻りが認められていないので) 前の議論を読み返したりしにくくするため、議論の個別的な処理・評価を促進すると考えられる (Jonas, Schulz-Hardt, Frey, & Thelen, 2001)。また、実験材料の議論も、争点を巡って対立してはいるものの、議論間に一方が他方を論駁しているといった (対立を超えた) 修辭的關係は存在せず、対立する議論の関連づけを積極的に動機づけるものになっていない。

確かに、バイアスがかった同化にアプローチする場合、関連づけ処理の影響を考慮しなくてもよいことを示しているように見える知見もある。例えば、Munro et al. (2002) は、大統領選挙運動期間中に実施された大統領候補者討論会の映像を実験材料として、事前態度 (候補者に対する支持) が討論会における各候補者の説得力評価や勝ち負け (討論で勝ったのは候補者のどちらか) の判断に及ぼす影響を調べた。討論会である以上、対立する議論は反論や再反論などを含むダイナミックな応酬であったことに注意してほしい。にもかかわらず、Munro et al. はバイアスがかった同化を見出した。同様の結果は Correll, Spencer, & Zanna (2004), Richardson et al. (2008) でも報告されている。ただし、これらの研究は、討論会の議論を実験参加者がどのように理解したか調べていない。対立する議論を十分に関連づけていなかった、あるいはその関係を正確に理解していなかった可能性もあり得る。

実際、対立する議論と接触しても、自発的にそれらを関連づけようとしなかったり修辭的關係の理解に失敗したりすることは決して珍しいことではない (Bernstein, 2010; Geisler, 1994; 小林, 2008, 2010; Kobayashi, 2010)。例えば、Kobayashi (2009) や小林 (2012, 2015) は、大学生を対象とした実験で、対立する議論の読解中、その修辭的關係を探るよう促された群と自分の意見生成を促された群を比較したところ、前者の方が後者と比べて、修辭的關係を示すコメントや図・線などをメモした人数が多いことを明らかにした。少なくとも大学生は、外から促されないと対立する議論を能動的に関連づけようとならない者が多いことがわかる。また、小林 (2009) は、大学生が対立する議論の読解中にその修辭的關係に言及したコメントの内容や事後テストで記述した修辭的關係の内容を分析し、言及・記述された修辭的關係の3割近くが (議論の内容に照らして) 妥当とは言えないことを示した。このように、対立する議論との接触が必ずしも適切な関連づけにつながらないことを踏まえると、Correll et al. (2004) や Munro et al. (2002), Richardson et al. (2008) などの知見だけを根拠にして、関連づけ処理の影響を無視してよいと結論づけるのは早い。

1.3. 本研究の目的

関連づけ処理が議論評価に及ぼす事前態度の影響を調整するのかどうか、さらにそれが態度変化とどのように関連するのか検討することが本研究の目的である。

実験では、非配偶者間人工授精 (donor insemination : DI) で生まれた子ども (DI児) の出自を知る権利を保障するために、精子提供者の情報開示を認めるべきかどうかという問題に対する実験参加者の事前態度を調べた後、その問題を巡って対立する立場の (そして議論間に論駁的關係が存在する) 2つのテキストを同時に提示し、それらを参照しながらテキストの議論を評価してもらった。対立する議論を自発的に関連づけようとしなかったり修辭的關係の理解に失敗したりする可能性があることを踏まえ、半数の実験参加者には関連づけ処理を促す読解教示を与えた。すなわち、テキストを読む際に、議論間の修辭的關係についてヒントを提示し、対立するテキストの議論を比較・対比するよう教示した。残り半数の実験参加者には、2つの

テキストをよく読むようにとだけ教示した。なお、読解中、実験参加者はメモをとることができた。議論の評価後、事後態度の調査、(各議論の内容的な理解を調べる) 議論理解テスト、(論駁の関係の有無やどちらがどちらを論駁していたかなどの修辭的關係を正しく理解できたか調べる) 修辭的關係理解テストを実施した。

関連づけ処理の調整効果は、次の2つを分けて検討した。1つは、関連づけ処理促進の有無によって議論評価に及ぼす事前態度の影響が異なるかどうかである。実験参加者が関連づけ処理に消極的で、かつ関連づけで事前態度の影響が弱まるとしたら、バイアスがかかった同化は関連づけ処理促進あり群よりもなし群で顕著に現れるだろう。もう1つは、修辭的關係理解の程度によって議論評価に及ぼす事前態度の影響が異なるかどうかである。修辭的關係の正しい理解によって事前態度の影響が弱まるとしたら、バイアスがかかった同化は理解度のより低い実験参加者ほど顕著に現れるだろう。

態度変化については、対立する議論との接触による態度変化の有無や方向、(関連づけ処理が事前態度の影響を取り除かない場合) 議論の評価を介して事前態度が態度変化に及ぼす影響を検討した。

2. 方法

2.1. 実験参加者

大学生105名(男性51名、女性54名)が実験に参加した。その平均年齢は19.04歳($SD = .60$)である。各実験参加者は、関係づけ処理促進あり条件($n = 52$)か関係づけ処理促進なし条件($n = 53$)のいずれかに、ランダムに割り当てられた。

2.2. テキスト材料

小林(2015)が用いた2つのテキストを一部改変しテキスト材料とした。この2つは、DI児の出自を知る権利を保障するために、精子提供者の情報開示を認めるべきかどうかを主要な争点として対立している。1つのテキスト(1,081字、出所情報「金田信子(弁護士)、毎日新聞2012年」と共に提示された)は精子提供者の情報開示に肯定的であり、もう1つのテキスト(1,067字、出所情報「吉村卓二(産婦人科医)、読売新聞2012年」)は情報開示に否定的であった。それぞれのテキストは(番号または記号を振った)5つの段落から構成され、2~4番目の段落がそれぞれ下位の争点・論点に関する議論になっていた。Table 1には各議論の概要を示す。6つの議論のうち、議論③と⑩の間には、情報開示による精子提供者の減少を巡る問題で議論③が議論⑩を論駁する関係が、議論④と⑥の間には、精子提供者の情報開示が本人やその家族に及ぼす悪影響を巡る問題で議論⑥が議論④を論駁する関係が存在した。

2.3. 事前態度と親近性、個人的重要性

非配偶者間人工授精、日本におけるその現状や精子提供者の情報開示に関する法的規定などの背景情報を説明した記述を提示した後、情報開示に対する事前態度を調べる3つの項目(情報開示に対する賛否、情報開示の必要性、情報開示の正しさ)にそれぞれ9件法(-4「強く反対」~0「どちらとも言えない」~+4「強く賛成」、-4「全く不要」~0「どちらとも言えない」~+4「とても必要」、-4「全く間違い」~0「どちらとも言えない」~+4「とても正しい」)で評

Table 1 テキストの議論 (要約)

肯定的テキスト
② 日本も批准している児童の権利に関する条約に依るならば、出自を知る権利はDI児が有する基本的な権利と言える。したがって、DI児に自分の出自を知ることを認めないということは、彼らの基本的な権利を奪うことになる。
③ 情報を開示すると精子提供者が減少してしまうからDI児の出自を知る権利を認めないというのはおかしい。現状維持を図るのではなく、提供者を増やすために、精子提供に対する人々の理解や意識を変える努力をすべきである。事実、海外にはそうした取り組みの成功例もある。
④ DI児に情報開示すると精子提供者に親としての責任や義務が求められるようになることを危惧する声もある。しかし、この問題は、そうした責任・義務がないことを明確に規定した法律を制定することで回避できる。
否定的テキスト
⑤ 情報開示にあたって精子提供者に親としての義務や権利を認めない法律を制定しても、そうした法律ではDI児が提供者と面会しようとする行動まで規制することはできない。その結果、提供者やその家族になんらかの悪影響を及ぼす可能性が出てくる。
⑥ DI児のアイデンティティ確立のために、適切な時機に真実告知が必要なこともある。しかし、治療の事実を伝えることと精子提供者の情報開示は分けて考えるべきであり、適切な真実告知がなされれば、情報開示を必ずしも必要としない。
⑦ 精子提供者の情報が開示されると、匿名を希望する多くの人々は提供者になることをためらい、生殖補助医療の実施に支障を来す可能性がある。実際、スウェーデンではそうした問題が起きている。

定してもらった。これら3つの項目の評定値を平均した値を事前態度とした (Cronbachの $\alpha = .69$)。

また、精子提供者の情報開示に関する問題や議論に対する親近性、その問題の個人的重要性を調べる項目にもそれぞれ9件法 (-4「全く知らない」～0「どちらとも言えない」～+4「よく知っている」、-4「全く重要でない」～0「どちらとも言えない」～+4「とても重要である」) で評定してもらった。

2.4. 議論の評価

各テキスト全体と個々の議論の説得力を9件法 (-4「全く説得力がない」～0「どちらとも言えない」～+4「とても説得力がある」) で評価してもらった。

2.5. 事後態度

事前態度と同じ3つの項目を用いて、事後態度を調べた ($\alpha = .73$)。

2.6. 議論の理解

各議論の内容的理解を調べるために議論理解テストを作成し実施した。このテストは、2つのテキストに書かれていた、(a) 情報開示に賛成する理由や反対意見に対する反論、(b) 情報開示に反対する理由や賛成意見に対する反論をそれぞれ全て思い出し、各理由・反論の内容

を簡潔に要約し箇条書きするというものである。

実験参加者が記述した内容は、各議論の要点（論駁がある場合にはそれも含む）を正しく捉えている場合に理解できていると判断し、そう判断された議論を1つ1点として数え理解得点とした。あわせて、論駁的關係が存在する議論③①と議論④②のペアごとにも理解得点を算出した。

2.7. 修辭的關係の理解

議論間の修辭的關係を正しく理解したか調べるために、修辭的關係理解テストを作成し実施した。このテストでは、下位の争点・論点を後の(1)～(4)の形にまとめて提示し、それぞれのテキストが各争点・論点到直接関わる議論をしていたか、各争点・論点に関して肯定的テキスト（否定的テキスト）の議論に否定的テキスト（肯定的テキスト）の議論を論駁する内容が含まれていたか判断し「○」（議論していた、含まれていた）または「×」（議論していなかった、含まれていなかった）で答えるよう求めた。

- (1) 精子提供者の匿名性は、提供者を確保するために必要か。
- (2) 子どもの基本的権利により、DI児には自分の遺傳的な父母を知る権利があるか。
- (3) DI児にDIで生まれた事実を適切に伝えるならば、精子提供者の情報開示は必要なのか。
- (4) 法律を整備すれば、精子提供者の情報開示が提供者側に悪影響を及ぼすことはないのか。

争点・論点(1)は、2つのテキストで取り上げられ、肯定的テキストの議論に否定的テキストの議論を論駁する内容が含まれているが、逆に否定的テキストの議論には肯定的テキストの議論を論駁する内容が含まれていないと回答した（回答パターンがそうになっていた）場合に、修辭的關係を正しく理解していると判断した。同様に、争点・論点(2)と(3)はそれぞれ、肯定的テキスト、否定的テキストでのみ取り上げられていたと回答した場合に、争点・論点(4)は、2つのテキストで取り上げられ、否定的テキストの議論に肯定的テキストの議論を論駁する内容が含まれているが、逆に肯定的テキストの議論には否定的テキストの議論を論駁する内容が含まれていないと回答した場合に、正しく理解していると判断した。そして、正しく修辭的關係を理解した争点・論点を1つ1点として数え、理解得点とした。

2.8. 手続き

実験は集団で実施した。実験参加者にはまず、事前態度と親近性、個人的重要性を調べる項目を評定してもらい、それから、2つのテキストを配布した。関係づけ処理促進あり群には、「後で質問に答えられるように、両者の議論を比較・対比しながら、特に、段落③と①、段落②と④の關係に注意して」2つのテキストをよく読むよう教示した。一方、関係づけ処理促進なし群には、後で質問に答えられるように2つのテキストをよく読むよう教示した。なお、実験参加者はテキスト読解中にメモをとることができた。10分が経過したところで、彼らにテキストを参照しながら議論の評価をおこなってもらった。テキストや議論評価の回答用紙を全て回収した後、事後態度の調査、議論理解テスト、修辭的關係理解テストをこの順序で実施した。実験に要した時間はおおよそ50分である。

Table 2 重回帰分析の結果

説明変数	テキスト全体	段落③と①	段落③と④
事前態度 (A)	.47 (.13)***	.29 (.17)	.16 (.16)
条件 (B)	.28 (.39)	.40 (.49)	-.28 (.47)
修辭的關係の理解 (C) ^a	.30 (.21)	1.36 (.53)*	-.74 (.49)
議論の理解 ^a	-.50 (.16)**	-.60 (.43)	-.47 (.34)
A × B	-.56 (.27)*	-.07 (.33)	-.13 (.33)
A × C	.09 (.15)	.62 (.35)	.61 (.31)
R^2	.22 ***	.12 *	.12 *

注)セル内の数値は非標準化偏回帰係数(標準誤差)。^aテキスト全体:総合得点,段落③と①:③と①の理解得点,段落③と④:③と④の理解得点

* $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$.

3. 結果

3.1. 予備的分析

精子提供者の情報開示に関する問題や議論に対する実験参加者の親近性,その問題の個人的重要性の平均評定値はそれぞれ, -2.67 ($SD = 1.72$) と .01 ($SD = 2.04$) であり,関係づけ処理促進あり群となし群の差は有意でなかった ($ts < 1.49$)。なお,両変数とも本研究の主たる変数との間に有意な相関が見られなかったため,後の分析からは除外した。

実験参加者がテキスト読解中に産出したメモに,テキスト間の関係を記述したり図式化したりした内容(間テキスト的メモ)が含まれているかどうか調べたところ,関係づけ処理促進あり群の方がなし群よりも,間テキスト的メモを産出した人数が有意に多かった(29名[55.8%] vs. 12名[22.6%], $\chi^2[1, N = 105] = 12.10, p < .001$)。この結果は,関係づけ処理促進の実験操作が妥当であったことを示唆している。ただし,議論の理解得点 ($M = 3.85, SD = 1.28$) と修辭的關係の理解得点 ($M = 1.35, SD = .97$) では群間の差が有意でなく ($ts < 1$),関係づけ処理の促進が議論の理解や修辭的關係の理解につながっていなかった。

3.2. バイアスがかかった同化に関係づけ処理が及ぼす効果

否定的テキスト ($M = 2.21, SD = 1.15$)の方が肯定的テキスト ($M = 2.21, SD = 1.15$)よりも説得力の評価は高かった ($t[104] = 5.90, p < .001$)。同様の結果は,議論③と① ($M = 1.30, SD = 1.84$ vs. $M = 1.94, SD = 1.42$),議論④と③ ($M = .22, SD = 2.15$ vs. $M = 1.44, SD = 1.72$)をそれぞれ比較した場合にも見られた ($ts[104] = 2.92, p < .005, 4.46, p < .001$)。

テキスト全体の評価においてバイアスがかかった同化が見られるか,また,もし見られる場合に関係づけ処理が調整変数になるか検討するために,各実験参加者内で肯定的テキストの説得力評定値から否定的テキストの説得力評定値を引いた値を従属変数,事前態度,関係づけ処理促進条件(あり = 1,なし = 0),議論の理解,修辭的關係の理解,事前態度 × 条件,事前態度 × 修辭的關係の理解を説明変数とした重回帰分析をおこなった。説明変数は全てセンタリングした値を用いた。分析の結果,Table 2に示すとおり,事前態度 ($B = .47, SE = .13, p < .001$),議論の理解 ($B = -.50, SE = .16, p < .005$),事前態度 × 条件 ($B = -.56, SE = .27, p < .05$)

が有意な説明変数であった。事前態度×条件の交互作用についてさらに単純傾斜の分析をおこなったところ、関係づけ処理促進あり群の場合、事前態度の影響は有意でなく ($B = .08, SE = .24$)、逆に、なし群の場合、有意であった ($B = .74, SE = .18, p < .001$)。

同様の分析を、議論③④、議論④⑤に対してもそれぞれ実施した。すなわち、議論③の説得力評定値から議論④の説得力評定値を引いた値、議論④の説得力評定値から議論⑤の説得力評定値を引いた値をそれぞれ従属変数にして、事前態度、関係づけ処理促進条件 (あり = 1, なし = 0)、議論 (③と④、または④と⑤) の理解、修辭的關係 (③と④、または④と⑤) の理解、事前態度×条件、事前態度×修辭的關係の理解を説明変数として重回帰分析をおこなった。結果は Table 2 に示すとおりである。議論③④の評価は、修辭的關係の理解 ($B = 1.36, SE = .53, p < .05$) が唯一有意な説明変数であった。議論④⑤の評価では、いずれの説明変数も有意でなかった。

3.3. 態度変化

実験参加者全体で見ると、精子提供者の情報開示に対する事前態度 ($M = .35, SD = 1.49$) と比べて、対立するテキストを読んだ後の事後態度 ($M = -.21, SD = 1.23$) は有意に低く ($t[104] = 4.02, p < .001$)、情報開示に否定的な方向に変化したことがわかる。

態度の両極化現象が生じた可能性を検討するために、事前態度の得点で実験参加者を情報開示に肯定的な立場 (値がプラス: 61名) と否定的な立場 (値がマイナス: 36名) に分け、2 (態度: 事前, 事後) × 2 (立場: 肯定的, 否定的) の分散分析を実施した。分析の結果、態度の主効果 ($F[1, 95] = 10.02, p < .005$)、態度×立場の交互作用 ($F[1, 95] = 36.82, p < .001$) が有意であった。態度×立場の交互作用についてさらに下位検定を実施したところ、肯定群では、事前態度 ($M = 1.40$) の方が事後態度 ($M = .20$) よりも有意に高く ($F[1, 95] = 57.42, p < .001$)、否定群の場合、両者の差は有意でなかった ($F[1, 95] = 3.35$)。つまり、対立するテキスト読解によって態度の両極化が生じたことを示す証拠は得られなかった。

議論の評価が態度変化に及ぼす影響は、テキスト全体 ($B = -1.4, SE = .07$) は有意でなかったが、議論③④ ($B = -1.23, SE = .05, p < .05$)、議論④⑤ ($B = -.16, SE = .06, p < .005$) は有意であった。さらに、先の分析で、関係づけ処理促進なし群は、事前態度がテキスト全体の評価に有意な影響を及ぼしていたことから、この群において態度変化に対する事前態度の間接効果が有意か調べた。具体的には、Preacher & Hayes (2008) の手法を用いて、事前態度と事後態度の差 (前者から後者を引いた値) を従属変数とし、事前態度を独立変数、テキスト全体の評価を媒介変数にして間接効果を推定した (ブートストラップ標本数5000)。その結果、媒介変数のブートストラップ推定値 ($B = -.19, SE = .08$) の95%信頼区間 (biased corrected and accelerated 95% CI = $-.37, -.07$) に0が含まれておらず、間接効果が有意であった (ちなみに、関係づけ処理促進あり群は、 $B = -.05, SE = .06$, biased corrected and accelerated 95% CI = $-.16, .05$)。

4. 考察

本研究では、対立する議論の評価に及ぼす事前態度の影響を議論の関連づけ処理が調整するかどうか、さらにそれが態度変化とどのように関連するのか検討した。実験の結果、まず、

テキスト全体の評価で関連づけ処理促進の調整効果が見られた。すなわち、関連づけ処理促進なし群で事前態度がテキスト全体の評価に影響を及ぼしたのに対して、あり群では影響を及ぼさなかった。一方で、修辭的關係理解の調整効果、議論③①と議論④②の評価における関連づけ処理促進や修辭的關係理解の調整効果はいずれも有意でなかった。

テキスト全体の評価において、関連づけ処理の調整効果が関連づけ処理促進の有無でのみ見られ、修辭的關係理解では見られなかったという結果は、修辭的關係をどのくらい正しく理解できたかではなく、対立する議論を関連づけようとしたかどうか事前態度の影響を左右したことを示唆する。関連づけ処理が常に間テキスト的メモの産出に結びつくわけではないとしても、間テキスト的メモを産出した実験参加者の割合は関連づけ処理促進あり群55.8%に対して、関係づけ処理促進なし群がわずか22.6%でしかないことから、実験参加者が自発的な関連づけにかなり消極的であったことが窺える。議論間の修辭的關係についてのヒントや、対立するテキストの議論を比較・対比するよう方向づける教示は、そうした実験参加者に関連づけを促し、事前態度の影響を取り除くことにつながったのだろう。Jonas et al. (2001) は、意思決定を目的とした情報探索において、対立する情報の同時提示により関連づけ処理が容易になることで、確証バイアス（すなわち、事前態度・信念の影響）が減少することを明らかにしている。本研究の知見は、同様の効果に対立する議論の評価でも得られることを示唆しており、興味深い。

論駁的關係にある議論の評価では関連づけ処理の調整効果が見られなかった。しかし、議論③①の評価に修辭的關係の理解が有意な影響を及ぼし、正しく理解した者ほど議論③（論駁の議論）の説得力を議論②（被論駁の議論）よりも高く評価する傾向が見られた。この知見は、議論間の修辭的關係がそれら議論を評価する際のリソース（Kobayashi, 2010）になり得ることを示唆している。一方、事前態度は議論③①と議論④②どちらの評価でも有意な説明変数ではなかった。個々の議論を評価する場合、テキスト全体を評価する場合とは異なるリソースが用いられるのかもしれない。バイアスがかかった同化の研究はこれまで、（本研究でいう）テキスト全体のレベルを焦点化してきた。評価対象のレベルによって議論評価に及ぼす事前態度の影響が変化するのか、その検討は今後に残された課題である。

テキスト全体の評価に事前態度が影響した関連づけ処理促進なし群の場合、先行研究の知見（Druckman & Bolsen, 2011; Greitemeyer, 2014; Miller et al., 1993; Taber et al., 2009; Taber & Lodge, 2006）と同様に、事前態度はその評価を介して間接的に態度変化にも影響を及ぼした。つまり、事前態度で精子提供者の情報開示に否定的な実験参加者ほど、バイアスがかかった同化を介してより否定的になる傾向が見られた。一方、事前態度がテキスト全体の評価に影響しなかった関連づけ処理促進あり群の場合、当然ながら、間接効果も有意でなかった。以上の結果をまとめると、関連づけを促すことでバイアスがかかった同化を抑え、それがさらに事後態度に及ぼす事前態度の影響を多少なりとも抑制する、というプロセスを仮定できるだろう。

ただし、本研究で見られた態度の変化は、いわゆる両極化ではなかった。「問題と目的」で触れたように、対立する議論との接触が実際に態度の両極化現象を引き起こすかどうかについて研究知見は割れている。本研究では、直接的測度を用いた場合、態度の両極化が見られないことを示した先行研究の知見（Corner et al., 2012; Greitemeyer, 2014; Kuhn & Lao, 1996; Miller et al., 1993; Munro & Ditto, 1997; Munro et al., 2002）と一致する結果が得られたと言える。

本研究の理論的・実践的な意義として、次の2点を指摘したい。1つは、本研究が、対立す

る議論の評価において、個別的な議論の処理過程とは別に、関連づけ処理の過程があり得ること、さらに所産の違いから両過程の区別に実質的な意味があることを実証的に明らかにした点である。バイアスがかかった同化研究は従来、個別的な議論の処理過程を暗黙裏に仮定し、その仮定の下で理論的・実証的な検討を進めてきた。今後、対立する議論の評価や態度の両極化現象にアプローチする場合、そうした仮定を見直し、理論的・方法的枠組みを拡張・修正していく試みが求められよう。もう1つは、関連づけ処理が議論評価のバイアスやそれに伴う態度変化への影響を低減する手段になり得ることを示した点である。バイアスがかかった同化やその媒介効果を示す数多くの研究知見とは対照的に、対立する議論の評価という文脈で、有効なデバイアスの方法を実証的に検討した研究は、Lord et al. (1984) や Correll et al. (2004) を除いて見当たらない。Lord et al. (1984) は「その逆の場合を考えよう」方略 (consider the opposite: 仮に証拠が逆の結論を支持していたとして、その場合でも自分は同じように評価するか考えさせる方法) の有効性を検証し、Correll et al. (2004) は自己肯定により事前態度の影響が減少することを実証したものである。これらとは違う、関連づけ処理に基づく新しいデバイアス方法を探索し開発する上で、本研究の知見は有益な示唆を与えるだろう。

ただし、本研究で用いたオフライン測度では、具体的に議論がどのように関連づけられ評価されたのかを明らかにする上で限界がある。今後は、オンライン測度 (発話思考法など) などを用いた、関連づけ処理と評価過程の詳細に迫る分析が求められる。また、先行研究の多くは論駁的関係にない議論を実験材料に用いてきたが、そうした議論でも関連づけ処理の効果が見られるのだろうか。討論会など、人と人との対面的な応酬という形で提示される議論の場合はどうなのか。こうした問題の検討は今後に残された検討としたい。

引用文献

- Bernstein, J. L. (2010). Using "think-alouds" to understand variations in political thinking. *Journal of Political Science Education*, 6, 49-69.
- Corner, A., Whitmarsh, L., & Xenias, D. (2012). Uncertainty, scepticism and attitudes towards climate change: biased assimilation and attitude polarisation. *Climatic Change*, 114, 463-478.
- Correll, J., Spencer, S. J., & Zanna, M. P. (2004). An affirmed self and an open mind: Self-affirmation and sensitivity to argument strength. *Journal of Experimental Social Psychology*, 40, 350-356.
- Druckman, J. N., & Bolsen, T. (2011). Framing, motivated reasoning, and opinions about emergent technologies. *Journal of Communication*, 61, 659-688.
- Edwards, K., & Smith, E. E. (1996). A disconfirmation bias in the evaluation of arguments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 5-24.
- Geisler, C. (1994). *Academic literacy and the nature of expertise: Reading, writing, and knowing in academic philosophy*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Greitemeyer, T. (2014). I am right, you are wrong: How biased assimilation increases the perceived gap between believers and skeptics of violent video game effects. *PLoS ONE*, 9, e93440.

- Jonas, E., Schulz-Hardt, S., Frey, D., & Thelen, N. (2001). Confirmation bias in sequential information search after preliminary decisions: An expansion of dissonance theoretical research on selective exposure to information. *Journal of Personality and Social Psychology*, *80*, 557-571.
- Kim, Y. (2011). The contribution of social network sites to exposure to political difference: The relationships among SNSs, online political messaging, and exposure to cross-cutting perspectives. *Computers in Human Behavior*, *27*, 971-977.
- Nagler, R. H. (2014). Adverse outcomes associated with media exposure to contradictory nutrition messages. *Journal of Health Communication: International Perspectives*, *19*, 24-40.
- 小林敬一 (2008). 論争的な複数テキストの理解 - 発話思考法を用いた分析 - 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇), *58*, 159-170.
- 小林敬一 (2009). 論争的な複数テキストの理解 (2) - 誤りの分析 - 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇), *59*, 139-152.
- Kobayashi, K. (2009). Comprehension of relations among controversial texts: Effects of external strategy use. *Instructional Science*, *37*, 311-324.
- 小林敬一 (2010). 大学生は複数テキスト間の潜在的論争をどう理解するか? 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇), *60*, 85-96.
- Kobayashi, K. (2010). Strategic use of multiple texts for the evaluation of arguments. *Reading Psychology*, *31*, 121-149.
- 小林敬一 (2012). 大学生による書かれた論争への参加 - テキスト間関係の理解が果たす役割 - 教育心理学研究, *60*, 199-210.
- 小林敬一 (2015). 大学生における書かれた論争の自発的な理解 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会・自然科学篇), *65*, 65-76.
- Krosnick, J. A., Holbrook, A. L., & Visser, P. S. (2000). The impact of the fall 1997 debate about global warming on American public opinion. *Public Understanding of Science*, *9*, 239-260.
- Kuhn, D., & Lao, J. (1996). Effects of evidence on attitudes: Is polarization the norm? *Psychological Science*, *7*, 115-120.
- Lord, C. G., Lepper, M. R., & Preston, E. (1984). Considering the opposite: A corrective strategy for social judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, *47*, 1231-1243.
- Lord, C. G., Ross, L., & Lepper, M. R. (1979). Biased assimilation and attitude polarization: The effects of prior theories on subsequently considered evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, *37*, 2098-2109.
- McHoskey, J. W. (1995). Case closed? On the John F. Kennedy assassination: Biases assimilation of evidence and attitude polarization. *Basic and Applied Social Psychology*, *17*, 395-409.
- Miller, A. G., McHoskey, J. W., Bane, C. M., & Dowd, T. G. (1993). The attitude polarization phenomenon: Role of response measure, attitude extremity, and

- behavioral consequences of reported attitude change. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 561-574.
- Munro, G. D., & Ditto, P. H. (1997). Biased assimilation, attitude polarization, and affect in reactions to stereotyped-relevant scientific information. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 636-653.
- Munro, G. D., Ditto, P. H., Lockhart, L. K., Fagerlin, A., Gready, M., & Peterson, E. (2002). Biased assimilation of sociopolitical arguments: Evaluating the 1996 U. S. Presidential debate. *Basic and Applied Social Psychology*, 24, 15-26.
- Pomerantz, E. M., Chaiken, S., & Tordesillas, R. S. (1995). Attitude strength and resistance processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 408-419.
- Preacher, K. J., & Hayes, A. F. (2008). Asymptotic and resampling strategies for assessing and comparing indirect effects in multiple mediator models. *Behavior Research Methods*, 40, 879-891.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J., & Holt, K. (1985). Maintaining consistency between self-serving beliefs and available data: A bias in information evaluation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 11, 179-190.
- Richardson, J. D., Huddy, W. P., & Morgan, S. M. (2008). The hostile media effect, biased assimilation, and perceptions of a presidential debate. *Journal of Applied Social Psychology*, 38, 1255-1270.
- Taber, C. S., Cann, D., & Kucsova, S. (2009). The motivated processing of *political arguments*. *Political Behavior*, 31, 137-155.
- Taber, C. S., & Lodge, M. (2006). Motivated skepticism in the evaluation of political beliefs. *American Journal of Political Science*, 50, 755-769.

付記

本研究は科学研究費補助金・基盤研究C（課題番号15K04055）の助成を受けた。